

2019（平成31、令和元）年度

鳥取県NIE実践報告書



教育に新聞を

Newspaper in Education

鳥取県NIE推進協議会

～目 次～

・ 巻頭言	1
鳥取県N I E推進協議会長 藤田 安一	
・ 2019年度実践指定校の報告	
① 米子松蔭の取り組み（2年次）	2
米子松蔭高等学校	
② 社会とつながるN I Eの取り組み	7
鳥取県立八頭高等学校	
③ 「言葉の力」を育むことを目指したN I E実践	12
鳥取市立逢坂小学校	
④ 新聞活用による「探求基礎」と各教科の実践（1年次）	16
青翔開智中学校・高等学校	
・ 第24回N I E宇都宮大会に参加して	24
鳥取県N I E推進協議会長（鳥取大学地域学部名誉教授）	
	藤田 安一
鳥取県N I E推進協議会アドバイザー	岩井 克之
逢坂小教諭	松林 隆裕
青翔開智中・高司書	横井麻衣子
・ 鳥取県N I E推進協議会 会則	27



新型コロナウイルス感染拡大に思う

今こそ国家の安全保障から人間の安全保障への転換を

鳥取県N I E推進協議会長 藤田安一（鳥取大学名誉教授）

新型コロナ感染拡大が止まらない。これまでは、東京・大阪など大都会での人混みの映像とともに、コロナウイルス感染が報道されていたので、まだ他人事であると思っていた。しかし先日、鳥取県で初めての感染者が確認されてからは、危機を身近に感じるようになった。

しかも、私は過去に二度、喘息から肺炎を発症した経験がある。今回の新型コロナの特徴は、感染力が強いという以外に、高齢者、糖尿病や心臓病など基礎疾患のある人、肺炎の経験者などは、より重篤化しやすいと聞く。そのため、外出する時には気休めにマスクを2枚重ねで着けるようにしている。

それにしても、安倍政権のコロナ対策は、なにかと批判されることが多い。対応の遅さ、PCR検査の少なさ、財政的支援の薄さなど、ドタバタ感とともに危機管理能力の低さを露呈する結果となっている。その極めつきはアベノマスクだ。これには驚いた。

安倍首相は布製マスクを全世帯に2枚配布した。このマスク、小さすぎて顔にフィットしない。鼻を隠そうとすれば口がはみ出し、口を隠そうとすれば鼻が出てしまう。なんとも使い勝手が悪い。しかし、これにはマスク本体で220億円、それにパッケージ代と輸送費を加えると466億円もかかる。なんという無駄遣いであろうか。

報道によると、マスク配布のこの提案は2カ月前に経済産業省の官僚から出されたものらしい。それを今、実施することにしたのだ。マスク不足が盛んに報じられていた当時ならいざ知らず、このようなことが、現在の国民の要求に合致しているとも思っているのであろうか。へたなコントを見ているようだ。

政府の危機管理能力が低いからだと言ってしまうまでもそれまでだが、従来から危機管理や安全保障を絶えず口にし、それを売りにしてきた政府なのに、こうした現在の危機に対し右往左往しているのはどうしてだろう。

その原因は、政府が安全保障という際、もっぱら国家の安全保障に限定し、中国や北朝鮮の脅威を煽って、いかに対外的な軍事的脅威から国家を守るかを重視する一方で、今回のような感染症などに関する医療や保健・衛生分野での政策を軽視してきたことにあるのではないか。

その典型的な例が、昨年9月厚生労働省が示した全国424にも及ぶ公立・公的病院の再編統合方針だ。鳥取県でも岩美病院など4病院が名指しされた。診療実績が乏しいなどと判断して、国の医療費を削減するために病床数を減らすことを狙ったことだ。この露骨な人命軽視の政策に、関係自治体から強い批判がおこった。その真っ最中に、今回の新型コロナ感染の発生とその爆発的拡大が起きた。

この脅威を前にして、これまでの政府がとってきた国家安全保障はなんの役にも立たないことが2重の意味で明白になった。1つは、いくら兵器や弾薬をそろえても人間へのウイルス感染をとめることはできない。第2に、ウイルスは国を選ばない、国境を簡単に飛び越えてしまう。だから、軍事的に国家とその領土を守ることを目的とするこれまでの国家安全保障では対応できない。

現在、戦争だけが人間にとって主たる脅威ではない。グローバル化にともなってますます悪化する地球環境、多発する自然災害、格差と貧困の広がり、そして今回のような感染症の拡大など新たな脅威から、いかに一人一人の人間の命と暮らしを守るか。ここに、これまでの国家の安全保障から人間の安全保障への抜本的転換が求められる理由がある。

そのためには、大砲よりバターを優先させる財政支出の組み替えが必要であり、敵対する国家関係ではなく、現存の脅威に対し協調して立ち向かう国際関係を構築する必要がある。膨大な軍事費を使って、軍事戦略に特化したこれまでの国家安全保障の継続は、もはや許されない。

米子松蔭の取り組み（2年次）

米子松蔭高等学校 田子 奈美

1 はじめに

本校は、昨年に引き続きNIE 実践指定校となり、今年度も毎日、新聞を教室に届けることが出来た。まずは、そのことにとても感謝している。本年度は、高校3年生の受験生と、2年生の「地域活性」の授業で、新聞を活用した学習を行った。全校での取り組みではなかったが、生徒が新聞に興味を持ち、得た情報を学びに役立てたことは確かであった。今年度の具体的な取り組みは、以下の通りである。

2 実践の内容

(1) 2年生 「地域活性」の授業において

本校では、今年度、学校特設の授業で、「地域活性」という授業を行った。この授業では、①自分たちの住んでいる地域について、グループごとに調べる
②そこから課題解決や地元をアピールする提案を考える
③最終的にまとめたものを発表する
という手順で行った。

この授業では、生徒が自分たちの故郷について調べ、そこで出てきた問題を解決しようとする「課題解決能力」や、「情報収集能力」、「表現力」を身につけることをねらいとした。

まず、情報を集める手段として、生徒がよく使うのはインターネットであった。キーワードを入力すると、それに関する多くの情報がでてくる。だが、その情報が全て「真実」であるかどうか分からない。もちろんインターネットを使用することも良いのだが、正確な情報を集める手段の一つとして、新聞があることを生徒に知ってもらうことにした。

その手段として、出前授業を依頼した。ありがたいことにすぐに話を進めていただき、開催が決定した。講師に日本海新聞社のスポーツ記者の方に来ていただき、色々話をさせていただいた。ご自身の仕事の紹介をはじめ、新聞の優位性、記事作成の仕方（題材探しから原稿作成の仕方）、地域活性における新聞の役割など、盛り沢山の内容であった。運動部に所属している生徒が多いクラスでもあったので、スポーツ記事の作成に関する話を、興味津々に聞く生徒もいた。その中で記者が言われた、「スポーツ記事によって、その土地の人々の暮らしが、少しだけ彩られ、単調な生活がちょっとだけ豊かになる」

という言葉が心に残り、「地域を活性するために、自分もスポーツで活躍して盛り上げたい」という感想を持った生徒もいた。

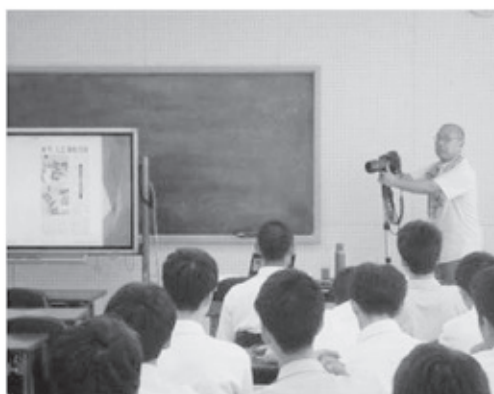
また、原稿の作成では、基本である5W1Hを押さえ、次にそれらをより具体的に書いていくことで出来上がることも教えてもらった。実際に、記者が一人の生徒にインタビューし、周りの生

徒がその内容を記事として文章でまとめる活動を行った。いざやってみると、生徒それぞれの書いた記事に違いがあるのはもちろんだが、「文章でまとめる」といったところで苦戦する生徒が多くいた。この点において、今後の課題として引き続き練習していくべきことが分かった。



出前授業の様子

○最初は緊張して反応が少なかったが、講師の話聞くうちに新聞記事に興味を持ち始めた。



○記事の書き方、新聞の読み方について説明を聞き、一人に一部ずつ配られた新聞を実際に読んでみる。



○インタビューを受ける生徒の話聞き、他の生徒たちがその内容をまとめて記事にする活動の一場面。

後日、出前授業で学んだことを活かし、調べ学

習に取り組んだ。地元の情報を集めたり、他県での地域活性の取り組みについて情報を集めたりするのに新聞を活用した。調べ学習の中で、時々生徒同士が、「これ見て」と新聞記事について盛り上がる様子を見ていて、他人とのコミュニケーションを生むツールとして、新聞は効果的であることが言えた。また、インターネットで調べると、そのキーワードに関する情報しか出てこないが、新聞では、ページをめくると思いがけない出会いがある。多岐にわたる情報が一括して掲載されているからだ。そうやって新聞は、読み手の興味、関心を広げてくれる。そして、そこで発見したことを、誰かに話したくたくなる。新聞は、調べ学習にもコミュニケーション活動にも役立つ理由がそこにあると感じた。



新型インフルエンザの影響で、学校が3月から臨時休校となってしまったが、ぎりぎり2月後半に、それぞれのグループが自分たちの調べたことを発表することが出来た。今回初めての授業科目であったが、生徒が目的をもって調べ、自分の考えをグループで話し合い、それらをまとめ、発表することで生徒の視野が広がった。埼玉県のある小学校の先生が、「自分で調べたことを責任感をもって発表することで、主体的に学ぶ力が身につく」と述べておられた。この授業は今年度初めての取り組みであったので、生徒も教員も手探りで苦労したこともあったが、新聞を活用したことで随分生徒たちの視野は広がった。来年度は、生徒がさらに主体的に授業に取り組んでいけるよう、今年度を振り返りながら取り組んでいきたい。



○新聞を情報源にして、地域について調べる生徒たち。

(2) 高3生徒の受験指導において

「受験生は、新聞を読め」と、昔からよく言う。私自身もそう言われ、社説を「何のこと？」と思いつつながら読んだことを覚えている。そして、何十年も経った今、改めて新聞の価値を理解し、生徒に「新聞はいいぞ」と言って、受験指導に新聞を活用してみた。その例をいくつか挙げてみる。

① 記者、読者のコラムやエッセーの紹介

受験生は勉強も大変だ。そして、自分自身との戦いも大変である。思うようにいかず泣きたくなるような時に、いかに切り替え、前に進んでいくか。希望の進路に進みたければ、自分を奮い立たせ、前に進まなければいけない。そんな生徒たちに、少しでも参考になればと思い、以下のような新聞のコラムやエッセーを生徒に紹介した。

- ・季節の移り変わりを気付かせてくれるもの
- ・心の持ち方、物事の捉え方
- ・健康法(簡単にできる運動やストレッチ、食事のバランス、緊張や不安を緩める呼吸法など)

私自身が読んで、生徒が気分転換を図るのに使えそうな記事や、元気になれるような記事を生徒に紹介した。テストには出ないことではあるが、自分のバランスをとることの重要性に気付くことができ、その方法を知っていれば、これから先にも役立つ情報であった。

② 面接練習の材料として

面接を受験に必要とする生徒が面接練習をする際に、最新の情報が載っている新聞はとても役に立った。「地域の防災について」「過疎化による公共交通機関の問題について」「イギリスのEU離脱について」「キャッシュレス化について」などのテーマで新聞記事を活用した。新聞から得た情報をまとめ、自分の考えも含めて表現することは、簡単にできることではなかったが、継続して取り組んでいくうちに、徐々に力がついていくのを、分厚くなっていく生徒の面接ノートと共に実感できた。

③ 人権学習において

人権学習の資料として、ヘイトスピーチや進学就職の場での人権問題に関する記事を参考に使った。人権意識を高めるためには、その問題を「自分ごと」として考えられるかどうかの部分が大きい。以前、部落差別について学習した際、アンケートで「今現在も部落差別があると思うか」という質問に対して多かった回答が、「昔はあったが、今は学習しているからないと思う」「年配の人が差別意識を持っているからまだ残っている」というものだった。自分は、小中高と学習してきているから大丈夫という気持ちがあるから、なかなか自分ごととして考えられないところを、「自分が当事者になるかもしれない」と考えるきっかけ作りとして、新聞記事が役に立った。決して自分とは関係ないことではない、いざ直面した時に気付けるかどうか、社会には理不尽なことが残念ながら多いことを、今の真実を報道する新聞は、生徒たちに教えてくれた。

④卒業式に誕生日新聞

自分が生まれた日に世の中で何があったかを載せた誕生日新聞を、生徒それぞれに、卒業式の日最後の LHR で送った。卒業後、県外に出る生徒もおり、親子の時間をこの誕生日新聞をネタにもってもらえたら、という思いがあった。NIE の実践校になってから、いつかこの「誕生日新聞」を生徒に渡したいと考えていた。

卒業式の日、生徒全員が、「これまで支えてくれた親や家族に感謝したい」と教室の後ろにおられる保護者に述べていた。誕生日は人それぞれ、いくつになっても特別である。それと同時に、家族をはじめ、周りに感謝したい日であることを、生徒には今後も忘れないでいて欲しい。

3. 取り組みの成果と課題

①成果

- 情報収集する際に、新聞は最新の情報を提供してくれると共に、読み手に新たな見方、考え方、気づきを与えてくれる材料であることに気付くことで、生徒がより新聞に興味を持つようになった。
- 調べたことをまとめる際、出前授業を参考にして読み手に分かりやすい文章の書き方を学べた。

②課題

- 私個人での取り組みになってしまい、学校全体での取り組みにならなかったが、今後は同じ教科の教員に新聞を活用した授業の提案をし、取り組めそうなものを行ってもらうことで、なるべく多くの生徒に新聞に触れてもらい、興味関心を持たせたい。

社会とつながるN I Eの取り組み

鳥取県立八頭高等学校 下谷 慎一

1. はじめに

八頭高校は全日制普通科、1学年7クラスで3学年合わせると21クラス、約800名の生徒が在籍している。総合コース、探究コース、体育コースの3つのコースに分かれている。令和2年度入学生より1クラス減となり、単位制高校となる。コース制から類型制へと変更され、2年次より探究、総合、看護・医療、体育の4つの類型へと別れることとなる。

生徒の進路状況を見ると4年制大学への進学者が約5割、短大が1～2割、専門学校が1～2割、就職者は5%程度となっており、進学する生徒が9割以上を占めている。このような状況の中で新聞というメディアを介して社会とのつながりを意識させ、主体的な学びへと導いていくことができないだろうかと考え、N I Eの活動を行うこととした。

本校でのN I Eの取り組みは地歴・公民科の教員を中心に実施することとしている。1年生で実施する現代社会の授業、2年生探究コースで実施する探究ゼミ、3年生の進路指導での活用を主な取り組みの場とした。

2. 実践の概要

実践の具体的な内容は次のとおりである。

①新聞閲覧コーナーの設置

生徒自習室の前に新聞閲覧コーナーを設置し、N I Eで提供していただいた新聞を自由に閲覧できるようにした。生徒自習室にはいわゆる赤本などの問題集が設置してあり、多くの3年生が学習している。その中でも、近年定員が増加している推薦・AO入試を受験する生徒が年々増加している。そのような入試においては小論文試験と面接試験が実施される場合がほとんどである。そこで問われる内容は受験する学部学科の内容に関して社会で問題とされていることが多い。開始時期の早いAO入試は8月から始まるが、直前になって慌てて時事的な内容を追いかけても試験では戦えない。やはり、日常的に社会の出来事に触れて知識を得ておくこと、そして問題意識を持つこと、さらには自分なりの意見を形成するというトレーニングが行われなければならない。それをアウトプットするトレーニングはあとでもよいが、まずは意見を形成するところに至らなければならない。そこで、早い時期から新聞を開き、社会の出来事に触れながら思考するということが行えるようにしようというのが閲覧コーナー設置の目的である。生徒自習室の先にある進路指導室にはコピー機が設置してあり、生徒は必要だと考えた新聞記事のコピーをとるこ



N I E新聞閲覧コーナー

とができるようにした。多くの3年生が新聞を活用しながら入試に備えていた。また、国公立大学の一般入試においても小論文や面接を実施する大学は多い。特に後期試験では実施割合が高い。推薦・AO入試対策と同様に3年生が新聞を活用していた。

②小論文指導における活用

近年の小論文では課題文型の出題が多く、問いを2つ以上に分けてある場合が多い。その典型的な出題方法は「問1 課題文の内容を要約しなさい。 問2 筆者の主張についてあなたはどのように考えるか、自分の意見を述べなさい。」という形である。つまり、要約と意見論述だ。また、意見論述の際に「具体例を述べながら」というような条件を付される場合も少なくない。したがって、読んで理解する力、自分の意見を形成する力、表現する力を身に着けておくことが求められる。具体例などを要求されると、様々な社会の問題に関心を持っていなかった生徒はとたんに筆が進まなくなる。今年度の入試では20人以上の生徒の個別指導を行ったが、その初期指導に新聞記事や社説を多く活用した。具体的には、社説を課題文とし、記事の内容の要約、それについての自身の考えを述べるという演習だ。それぞれの生徒が受験する学部学科の内容に親和性のある記事や社説を題材にして繰り返し書かせた。社説などは字数があまり多くない上に明確に意見が書かれているので小論文のトレーニングに使うにはとても優れている。また、実際の入試でも社説が課題文として出題されている場合がよくみられる。私が添削指導を担当した生徒が受験した大分大学経済学部では、日本経済新聞や朝日新聞、ウォールストリートジャーナルなどの記事が課題文に使われていた。また、大月市立大月短期大学の推薦入試では様々な新聞社の社説を課題文として毎年小論文試験が実施されている。

前任校においては小論文研究委員会が設置されていた。その活動の中でテキストやワークノートを作成し、新聞の活用を行っていた。特に小論文指導に優れていたのが、かつて毎日新聞に掲載されていた「闘論」という企画である。一つのテーマについて異なる立場の2人の専門家の意見が掲載されている。例えば、「小学校の英語必修化」というテーマについて藤原正彦氏（お茶の水女子大学）は「優先順位はずっと下であり、英語で国際人などというのは嘘である。」と述べている。これに対して中嶋嶺雄氏（国際教養大学）は「英語教育は国家戦略であり、言語能力を高めなければグローバル化が遅れる。」と述べている。生徒はこの二人の意見をそれぞれ要約する。そして、このような議論があることを踏まえた上で自身の考えを述べる。このような活動は受験指導の面が強いが、実はそれにも増して、生徒たちが社会に触れ、社会の問題点について考える場面を与えることとなる。「闘論」のような新聞の企画は非常に優れた教育に取り込める素材であり、新聞社のみなさんにはぜひ同じような企画をお願いしたい。また、本校では朝日新聞社の「朝日けんさくくん」を契約しており、この中にも新聞の記事や社説を使ったトレーニングのための教材が入っており、こちらも過去問演習の前の初期指導に活用している。

③探究ゼミにおける活用

本校では2年次より探究コースが2クラス設置される。探究理科・探究文科各1クラスずつである。探究コース生は1年間、16のグループに分かれてそれぞれが設定したテーマについて研究していく。地歴・公民に関するグループは3グループあり、そのうち、私が担当したグループで主に新聞を活用した。私が担当したグループの生徒たちは「地域課題解決のための起業プラン作成」ということをテーマに起業プランを作成するプロジェクトを行った。まず、八頭町の地域課題にはどのようなことがあるのかを明らかにしていくために新聞記事のスクラップブック作成を行った。5名の生徒がそれぞれ、日本海新聞2名、山陰中央新報1名、朝日新聞1名、読売新聞1名と担当を決めて新聞記事を集めていった。地域課題に関するものやその解決に向けた取り組みに関するものも含めて収集を行った。記事の下には新聞社の名前と記事の日付を記入させ、資料として活用する際に出典を明らかにすることの重要性についても理解を図った。スクラップブックはお互いにいつでも閲覧できるようにした。1カ月ほど新聞記事の収集を行い、その後、それぞれの収集した記事の中からいくつかを選び、相互に発表する機会を持った。その結果、「人口減少に伴う若者の流出」ということに焦点を絞り、起業プランを作成することとした。

ゼミの活動としては、起業プラン作成講座への参加。これらの経験を踏まえて各自が起業プランを作成。5つのプランをゼミの中で相互評価し格付けを実施。さらに、八頭町高校生議会が開催されることとなり、そこでさらにブラッシュアップしたプランを提案した。プランについては「地域の課題解決につながるか」、「純利益を上げ持続的に行えるか」、「未来につながる投資となっているか」という3点に留意しながら作成を行った。



生徒が作成したスクラップブック



プランを持ち寄り相互評価している様子

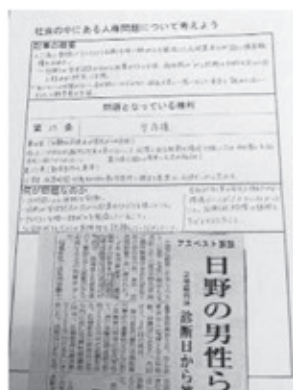
④現代社会の授業における活用

「日本国憲法の基本原理」という単元の中の憲法の人権規定と新しい人権に関する学習の発展学習として新聞を活用した授業を実施した。日本国憲法の中のいわゆる人権のカタログで学習した内容や新しい人権と呼ばれるものと密接に関連していると思われる新聞記事を選び、ワークシートに張り付け、その記事の内容をまとめ、関連している権利を書き出し、何が問題となっているのかを明らかにする。4人程度の小グループに分かれ、グループ内で

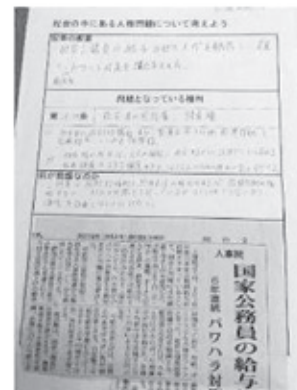
相互に発表し、代表を選び、クラス全体でその内容を共有することとした。ただし、「三菱樹脂事件」の判例で学習したのだが、憲法の人権規定の私人間効力については間接適用説の立場に立つことを確認した上で、あくまでも密接に関連した権利ということで記事の選択を行わせた。また、国内法は国外には適用できないが、そこも特に問題とせず、生徒の関心と思考を重視することとした。最初はどのような記事を選べばよいのか戸惑っている生徒も少なくなかったが、そのような生徒一人一人からの質問を受け付け、持ってきた記事について人権にかかわる問題はないだろうかと一緒に考えることで、新聞記事、ひいては社会で起こっている出来事を見る新しい視点に気づいていったようだ。生徒が選んだ記事の例をいくつか挙げると、児童虐待については幸福追求権（13条）や生存権（25条）、エジプトの反政府デモでは集会・結社・表現の自由（21条）、人事院勧告の記事については労働三権（28条）や財産権（29条）、国会で追及されている様々な疑惑に関する記事については知る権利（新しい人権）などを挙げていた。このように、厳密に言えばその内容に挙げられた権利が直接適用できるわけではないのだが、記事の内容を読み、よく考えて問題点を明らかにしていこうとする姿勢が見られた。また、記事の中から問題となっている人権を引き出す際、なるほどとこちらがうなってしまうようなセンスを発揮する生徒もいた。授業で学習する内容が、実際の社会と密接に関連している、授業の内容は他人ごとではなく、自身にもかかわってくる内容なのだと認識することができたようだ。



新聞記事を選んでいる様子



生徒が作ったワークシート



⑤他教科における取り組み

他教科においても新聞を活用していただいた例があった。国語科でおこなわれた実践に「話題を持ってる人になろう」というテーマで新聞から気になったニュースを選び出し、社会的な出来事、スポーツに関する出来事、地域の出来事、その他芸能なども含めてという4つのジャンルに分けてワークシートに書き出し発表するというものがあった。主に体育コースで行われた。社会の出来事に関心を持ってほしい、そのために新聞を読んでほしいという思いで実施されたとのことであった。NIEの活動でいただいた新聞については一定期間保管してみなさんが授業などに活用できるようにしている。さらに活用が拡大してほしい

い。

⑥その他

新聞への投稿を促す取り組みも行った。1年生全員に「新聞に自分の意見を投稿しよう！」という案内文書を配布して投稿を促した。投稿の送り先と、実際に掲載されていた投稿を掲載した文書を配布して呼びかけたが、なかなか自発的な投稿にはつながらなかった。以前、NIEを担当した際は私が取りまとめて新日本海新聞社に送付し、いくつかの文章を掲載していただいた。今回は各自の意思で自由に投稿することを期待した。こんな文章を投稿しようと思うのですが、どうでしょうかと相談に来る生徒も見られたが、もっと多くの生徒が取り組むためには、日常的に社会の出来事について意見を形成する取り組みを行っていく必要があるだろう。

3. 成果と課題

新聞を使った活動を行った生徒たちは、当初は新聞の構成やどのような内容が書かれているのかというようなことをほとんど知らなかった。近年はインターネットの普及やモバイル端末の普及により、自身が求める情報のみを得ようとする傾向が強まっている。しかし、教養を高め世界を広げていく上で新聞が重要であること、必要な情報が自分の意図していない部分に存在していることもあるというようなことが新聞を眺めてみて初めて分かる。活動に参加した生徒たちはそのことを感じることはできたのではないだろうか。ただ、学校全体ではなく一部の取り組みとなってしまっており、多くの教科での活用ができていないようでは効果は限定的なものになってしまう。本校では令和2年度入学生から「総合的な探究の時間」が本格実施となる。探究活動の中に新聞を使った活動を取り込むことも必要だろう。また、新聞を使った授業などの実践例も増やしていき、他の先生方にも活用しやすいようにしていかなければならない。

「言葉の力」を育むことを目指したN I E実践

鳥取市立逢坂小学校 松林 隆裕

1 はじめに

小規模校である本校の児童は、とても素直で仲が良く、学習にも落ち着いて取り組む。一方、集団の中で多様な考えにふれる機会が少なく、大勢の人の中で自分の考えを伝えるスキルを身に付けることが難しい環境にある。そこで、本校では、研究主題「自分の思いや考えを持ち、豊かに表現し、共に高まり合う子どもの育成」を目指し、国語科の学習を中心に研究を行っている。

本年度は、特に児童が学ぶ楽しさや自他の成長を実感しながら、主体的に「言葉の力」を身に付け、より豊かに自分の考えを表現していけるような手立ての工夫を試みた。その中で、言葉の力を獲得するツールとして、また、視野を広げ、表現の場として活用したものが、新聞である。

ここでは、新聞を活用しながら研究主題に迫ろうと試みた6年国語科「伝えたいことを新聞に投書しよう」の実践とN I E実践1年目として、児童が新聞に親しむために学校として取り組んだ実践のいくつかを報告したい。

2 実践内容

(1) 新聞を活用した授業実践

6年 国語科 単元名「伝えたいことを新聞に投書しよう」

(目標) 新聞の投書を読み比べる活動を通して、書き手が読み手を説得するための工夫を読み取ることができる。

①単元の導入で、学習の目的意識や相手意識を明確に持たせる

単元の導入では、前年度の6年生が書いた投書を紹介し、自分の考えを投書という形で、新聞を読む多くの人に伝えるという単元のゴールイメージを伝えた。実社会の人に自分の考えを伝えるということで、児童は緊張感や不安感を表していたが、それ以上に、投書というものに関心を持ち、投書を書いてみたいという意欲が見られた。

そして、分かりやすい投書を書くために、教材文にある4つの投書を読み比べ、投書の文章構成の工夫や読み手を説得する書き方の工夫を見つけ学んでいくことを確認し、学習の見通しを持たせた。

新聞の投書欄を活用することで、自分の考えを発信する場が、それまでの学校や地域よりも広くなり、伝える相手も実社会で生活している多くの人になる。そのことが、児童の関心や意欲、課題意識や切実感を高め、その後の主体的に学習に向かう姿につながったと考える。また、廊下のN I Eコーナーに置いてあるさまざまな新聞の投書欄に関心を持ったり、自分が書こうとする投書の内容に関する本を読んだりする姿が、学習と並行して見られるようになった。

②必要性のあるめあてを提示する

学習のゴールである「投書を書く」という言語活動に向けて、この時間で何をするのか、何



「伝えたいことを新聞に投書しよう」学習の流れ

ができればよいのかを、学習の流れの表で確認しながら具体的に示すようにした。4つの投書を読み比べ、書き手の主張を捉える時間、投書の文章構成の特徴や書き手の説得の工夫を見つける時間、学んだ説得の技を使って自分の考えを投書に書く時間等、毎時間のめあてに向けて学習を積み重ねることで、ゴールに1歩ずつ近づいていく感覚を児童と共有するようにした。めあてが明確で必要性があれば、児童はやりがいを持って主体的に学習に取り組み、達成感もはっきりと得られる。また、指導者も指導や評価を具体的に行うことができる。単元全体の流れと本時のめあての必要性、付けたい力などを児童と共有しながら学習を進めていくことが、主体的な学習を支える大切なポイントであると感じる。



本時のめあてを確認

③目的を自覚した意見交流をさせる

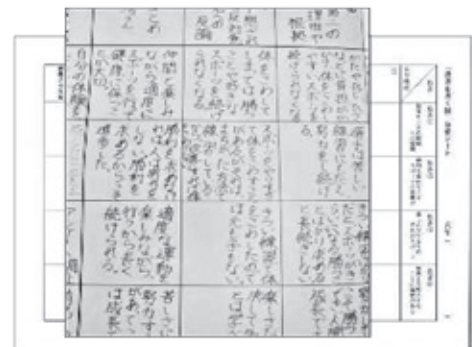
単元の中盤では、4つの投書の中から自分が納得した投書を1つ選び、その理由を友達と説明し合う活動を設定した。そして、意見交流の場を2段階に分けてみた。まずは、自分と同じ投書を選んだ友達との意見交流である。その投書のよさを再確認したり、同じ投書でも違う視点のよさに気づいたりさせるためである。次に、自分と異なった投書を選んだ友達との意見交流である。そこでは、質問や感想に加えて、4つの投書のよさの違いを見つけるように新たな視点を与えて活動させた。ただ相手の説明を聞くだけではなく、考えながら聞いたり、分析シートに友達の考えをメモしながら聞いたりする姿が見られた。意見交流が、単に意見の伝え合いに終わってしまわないためにも、意見交流の目的や話し方・聞き方の視点を明瞭・簡潔に示すことが大切であることを再確認できた。



ペアで意見交流

④しっかり書いてまとめてから伝える

4つの投書の説得の技を学ぶツールとして、「投書を書く技」分析シートを使った。一つ一つの投書を文章構成を考えながらまとめ直すことで、投書の共通点やそれぞれの投書の特徴を比較しやすくなり、とても効果があった。このシートは、対話のツールとしても役立った。自分の言葉でまとめているものは、話しやすくこだわりもある。このシートに加筆・修正をすることで自分の学びや考えの変化も分かり、それを次の対話に生かしていた。



「投書を書く技」分析シート

自分で言葉を選び、考えをしっかり書く力は、対話のある授業づくり、豊かな表現力の育成には欠かせないものである。表現というと話す活動をイメージしがちになるが、書くことが鍵であると感じる。書く表現活動を学習の中心に置くことで、自然と話す、読む、聞く力も向上してしていくと思う。

⑤学習したことを振り返り 自分の学びを自覚できるようにする

単元の後半では、それまで学習したことを活用して、自分が投書に書く内容とその構成を考

える活動を設定した。学習してきた読み手を説得するための文章構成で、自分の主張を伝えるためにはどの説得の技が適切なのかを考えながら、児童は真剣に投書作り計画に取り組んでいた。

完成した計画シートを読ませながら、自分が教材文から学び、身に付けた力を振り返らせた。また、その後完成した一人一人の投書を読み合いながら、友達がどんな技を使い、どんな効果があるのかを意見交流した。自分の経験や家族へのインタビューの結果、調査などの数値、歴史上の出来事などを説得の技として使い、読み手の反論を予想し答えるなど、どの児童の投書も学習の成果がみられ、自分の学びが自覚できるものであった。

児童が書いた投書は「若者の声」として、全員新聞に掲載された。家族や地域の人等の評価をもらい、児童は大きな達成感を得ることができた。

給食のパンの曜日についての主張を書いた投書には、給食センターより感想の電話が掛かってきた。また、陸上のリレーについて書いた投書には、1カ月後に他校の6年生が共感した文書を新聞に投稿してくれた。新聞に投書をするという活動を通して、実社会のさまざまな人の考えにふれることもできた。自分の主張をはっきりと伝えることの大切さや楽しさ、自分の言葉への責任の重さや自分の考えが認められた自信など、国語科のねらいである読む・書く力に加えて、社会とかかわる力や意欲も向上したと思われる。



「投書」作成シート



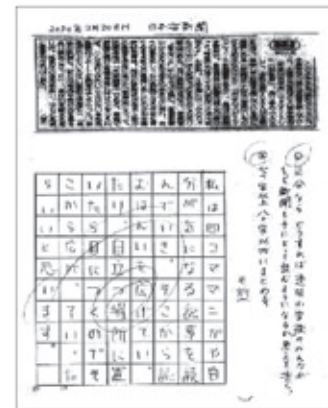
(2) N I Eタイムの実践

毎週木曜日の学力補充の時間にN I Eタイムを設定し、10分間で取り組める新聞を活用した活動を行った。新聞を通して、文字や言葉に慣れ親しんだり、読解力や表現力を高めたりする活動を行った。

N I Eタイムの取り組み		
学年	キーワード	見聞録
1・2年	楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・多読や書かぬ一冊だけ(読書・絵巻・長巻) ・ひらがな集の一冊集め ・好きな字探し ・言葉とかなをよ→新聞で好きなものをつくる・新聞で遊ぶ ・冬(寒・夏・雨)探し ・買った漢字探し ・当もしるし記事見つけ ・数字集め ・OOのつく言葉集め ・アフィリエイト(ローグ)集め ・国語学習集 ・新聞タイム ・見出しあてタイム
3・4年	慣れる	<ul style="list-style-type: none"> ・天竺人語(字)の探検 ・新聞記事を読んで5・7・5 ・新聞記事を読んで10マス完成 ・記事を読んでスピーチ ・新聞記事の読み比べ ・辞書活用集 ・国語学習集 ・字集り集
5・6年	考える	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事の読み比べ ・辞書活用集 ・国語学習集 ・字集り集



2年生「習ったかん字を見つけよう」



6年生「自分の考えを書こう」

(3) 新聞記事を活用した読書集会

本だけでなく新聞にも興味を持ってもらうために、年末に行われた読書集会では、新聞記事の中から見つけた令和元年のトップニュースを五・七・五の川柳で表す「川柳コンテスト」が開催された。このコンテストに向けて、1年間を振り返り、NIEコーナーに置いてある新聞記事の見出し等を参考にしながら、児童は言葉を選びながら熱心に川柳を考えていた。



盛り上がる新聞川柳コンテスト

3 成果と課題

(1) 成果

6年生の授業実践では、新聞に自分の考えを投書するという課題意識や相手意識を明確にした言語活動を設定し、単元全体の見通しを持たせながら学習を進めた。児童は、目的を持ちながら教材や新聞を読み、主体的に学習に取り組んだ。そこでは、学級の友達との対話だけでなく、新聞を通して、生の社会のさまざまな人との対話や考えが深まった自分自身との対話もできたのではないかと思う。

NIEタイムやNIEコーナーなど、日常的な活動や身近な環境の中に新聞を取り入れることで、児童は新聞を身近に感じるようになってきた。併せて、特に高学年は、社会の出来事に関心を持つようになり、自分の考えを自分の言葉ではっきりと表すようになってきた。

(2) 課題

まだ新聞を学習に十分に生かしていないが、本年度の実践を通して、新聞をうまく活用すれば、児童の主体的・対話的な学びを促し、実社会とつながる生きたわくわくする学習が展開できそうである。本校は小規模校であるが、新聞を活用しながら児童の視野を広げ、学習したことを地域や他校、そして実社会に発信する学習を展開することで、より確かな学力と豊かな人間力を育成していきたい。そのためにも次年度は、新聞活用場面をより明確に教育活動に位置づけるようにカリキュラム・マネジメントを行いながら、指導体制や方法を職員全体で模索していきたい。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
目標	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を	心豊かに、たくましく生きたくくらぼっ子の夢を
重点事項	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
学習活動	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
評価	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
学習活動	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
評価	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
学習活動	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
評価	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
学習活動	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
評価	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
学習活動	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成
評価	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成	基礎的な学力の育成



逢坂小学校くらぼっ子プロジェクト年間カリキュラム

新聞活用による「探究基礎」と各教科の実践

(N I E 実践報告 1 年次)

青翔開智中学校・高等学校
学校司書 横井 麻衣子

1 はじめに

平成 31 年度 (令和元年度) より N I E 実践指定校となった。本校の取り組むテーマは『新聞を活用することで、学校図書館の校内情報ハブとしての機能を向上させ、本校の総合的な学習の授業「探究基礎」と各教科の連携を深める。』である。

2 本校の状況

本校は鳥取市内唯一の中高一貫校であり、生徒全員が一人 1 台 iPad を持ち学習に活用している。また、校舎全域で無線 LAN (wi-fi) を利用することができる。さらに、NIE で日々届く新聞のほか、「朝日けんさくくん (朝日新聞)」と「ヨミダス for スクール (読売新聞)」という 2 種類の新聞記事検索データベースを利用することができる。データベースはそれぞれ同時接続 50 台までで、1 学年の生徒が同時に利用することができるので、授業でも活用されている。

N I E の実践を開始するにあたり、新聞やニュースに関する本校の生徒の実態を調査した。2019 年 5 月 1 日現在の生徒数は中学校 125 名、高等学校 128 名で全校 253 名。うち、調査の有効回答は 240 件であった。

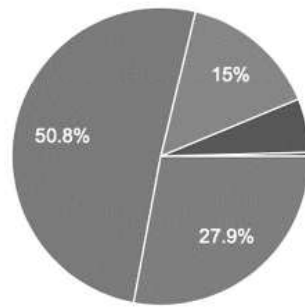
地域や社会で起こっている問題やできごとに「関心がある」と答えた生徒は 27.9%、「どちらかといえば関心がある」と答えた生徒は 50.8%で、全体としては 8 割の生徒が世の中に起こっていることに関心を持っている。

一方、紙の新聞を読むかという質問に対しては「ほぼ毎日読んでいる」と答えた生徒が 10.8%、「週に 2~3 回読んでいる」と答えた生徒が 16.3%にとどまり、ほとんど、「または全く読まない」と答えた生徒は 55.8%に昇る。

彼らがどのような手段でニュース情報を読んだり見聞きしたりしているのかという質問については、インターネットのニュースがほとんどを占めるかと予想していたが、85.4%が「テレビ」を選択しているほか、45.8%の生徒がインターネットの中でもブログや SNS といったコミュニケーションツールを情報源として活用しており、情報リテラシー教育、メディアリテラシー教育の必要性を感じる結果となった。注目すべき点として、電子版 (デジタル版) の新聞 (新聞社の公式アプリを含む) も 12.5% (240 名中 30 名) の生徒が利用している。海外では多くの新聞社がデジタル版に一本化しており、日本においてもスマートフォンの普及率とともに今後その動きは加速していくのではないかと予測している。

①あなたは、地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がありますか。

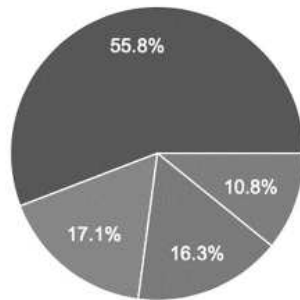
240 件の回答



- 関心がある
- どちらかといえば、関心がある
- どちらかといえば、関心がない
- 関心がない
- 医療などには関心があるけど、他は関...

②あなたは普段、「紙」の新聞を読みますか。

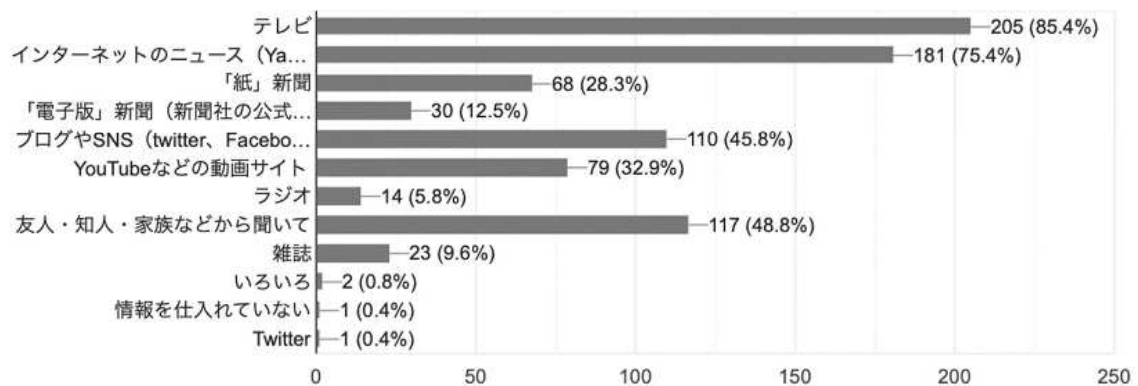
240 件の回答



- ほぼ毎日読んでいる
- 週に2~3回読んでいる
- 月に1~3回程度読んでいる
- ほとんど、または、全く読まない

③あなたは普段どのような手段でニュース情報を読んだり見聞きしたりしていますか。
(複数回答可)

240 件の回答



3 授業外の実践

3-1. 校内N I Eコーナー・掲示コーナーの設置

毎日届く新聞はラーニングセンターに設置した。ラーニングセンターは本校の図書館機能の中核であり、多くの図書館資料が揃っているほか、校舎中央に位置しており、すべてのクラスルームからアクセスしやすい場所である。

掲示コーナーには、総合的な学習の時間「探究基礎」で中学校3年次に取り組むテーマ「SDGs」に関する記事・英語外部試験の導入などの大学入試改革に関する記事・eスポーツに関する記事など、本校の生徒の実態に合わせて関心が高いと思われる記事をピックアップして切り抜きを展示した。こうした生徒の興味・関心の把握は、日頃から全学年に横断的に関わるができる図書館司書ができることのひとつで、N I E推進においても学校における図書館司書の果たす役割は大きいと思われる。

7/18に発生した「京都アニメーション放火殺人事件」を受け、夏休み明けには事件に関する各社の新聞記事と書籍の展示、募金コーナーの設置を行った。生徒にとって関心が高い事件であり、熱心に読む姿が見られた。事件に関連する誤報・犠牲者の実名報道に関する議論・便乗した脅迫事件の発生など、学ぶことが大きい事件であり、新聞が「生きた教材」となった。



▲新聞記事切り抜きコーナー



▲本校が取り上げられた記事の切り抜きコーナー



▲京都アニメーション関連の展示／取材記事▼



3-2. 朝新聞の取り組み

本校は毎朝、登校直後・朝のホームルーム前の8:30～8:40の時間を「朝読書」の時間として、全校で読書に取り組んでいる。今年度はNIEの取り組みとして、毎週金曜日を「朝新聞」の日とし、中学校3年生から高校2年生までの3学年で新聞を読んだ。「朝新聞」は社会科教員主導で進路委員会協力のもと行った。

手順としては、毎週金曜の朝、実施学年の進路委員の生徒がクラスの人気数の新聞を教室に持ち込み、クラスメートの机に配布する。生徒は配られた新聞の中から10分間で2～3記事を目安として関心を持った記事を読んでいく。中学校3年生は記事を切り抜きノートに貼っておき、翌週は記事の要約や感想をノートに記録する。高校1年生はiPadに「新聞記事フォルダ」を作り、関心を持った記事を撮影して画像として保存し貯めていく。

月に1回程度、「新聞シェア」の日を設け、自分の選んだ記事の要約や感想・意見を隣の席の生徒に伝える。紹介された生徒は質問や感想を述べ、交代して同様に行う。さらに、2学期以降は「新聞シェア」を学年横断で行った。中学校3年生と高校1年生、高校1年生と高校2年生など、毎月ペアを変え、1カ月間で読みためた記事の中からこれだと思うものを異学年に紹介し、記事を通して交流とディスカッションを行った。



▲毎週金曜の「朝新聞」を社会科・進路委員会の協力を得て実施



▲高校1～2年生は記事を撮影しiPadに保存



▲中学校3年生は切り抜きをノートに貼り、翌週は要約や感想を記録



▶毎月クラスメートや異学年と新聞記事を通して交流

4 授業における実践

4-1. 探究基礎（総合的な学習の時間） 出前講座・5W2H分析・新聞感想文コンクール

中学校1年生の総合的な学習の時間「探究基礎」においては、毎年「鳥取市に魅力的な〇〇をつくろう」を学年テーマに4月～1月までの約9カ月間プランニングに取り組む。今年度は「鳥取大丸に魅力的な体験型の店舗を作ろう」をテーマとして、新生大丸に向けた企画提案を行った。**NIIE出前授業**として山陰中央新報社 鳥取総局の榊井映志氏に来校いただき、新聞の特徴やネットニュースとの比較、新聞社による論調の違い、新聞記事の仕組みなどを講演していただいた。その後、情報収集の一環として、**デパートの催事の事例を新聞記事で調査し、5W2Hにもとづく分析**を行った。さらに、記事をもとに新聞感想文を書き、学年全員が「**第5回 日本海新聞 児童生徒新聞感想文コンクール**」へ応募した。



▲出前授業で新聞記事の仕組みについて学び複数社の記事を比較

5W2H 抽出 見出しやリード文を読み、新聞記事の情報を分析しよう

Who? (だれが/だれのために)	When? (いつ)	Where? (どこで)
はべ大丸を和食店	5月19日	鳥取大丸
<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)
What? (何が起ったのか)	How? (どのように)	How much? (割合に変わること)
和食店の特産品はべ大丸の焼き立て	新元号の祝い	12月19日(金)まで
<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)
Why? (なぜ)	今年、和食店が和食の魅力を伝えるために、和食の魅力を伝えるために	
<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	<input type="checkbox"/> 記事あり <input type="checkbox"/> 記事なし (予備)	

▶総合的な学習の時間の年間テーマに合わせて記事を選び 5W2H 分析（収支計画も含むため How much 分析を含む）

4-2. 国語科 新聞づくり（中学校1年）ディベート、記事の批判的読み（中学校3年生）

○中学校1年生 単元：「玄関扉」

上記の「探究基礎」で新聞の仕組みについて学んだことをもとに、新聞づくりに取り組んだ。

4-5 人 1 グループで**学校内の扉について取材した事実を、すでに教科書で学習した扉の種類や特徴とともに新聞形式にまとめた**。リード文やトップ記事の見出しの書き方など総合的な学習の時間に学んだことを活かすことができた。

○中学校3年生 単元：「間の文化」

単元の発展的学習として「日本はグローバル化における現代で間の文化を守るべきである。

是か非か」というテーマでミニディベートを行い、事実を根拠として意見を述べるディベートの型を学んだ。情報源として新聞記事を活用した。さらに、「日本は出生前診断を義務化すべき。是か非か」というテーマで本格的なディベートに取り組み、予選会で学年代表を選出して決勝戦を行った。

○中学校3年生 単元：「メディア・リテラシー」

単元の発展的学習として「新聞記事の批判的読み」を行った。フェアトレードに関する新聞記事を批判的に読み、問いを抽出する。KJ法によって問いをカテゴライズしていき、個々に取り組みたい問いをひとつ決定して調査しまとめる。フェアトレードの背景にある問題点や課題点を発見し、理解を深めることができた。



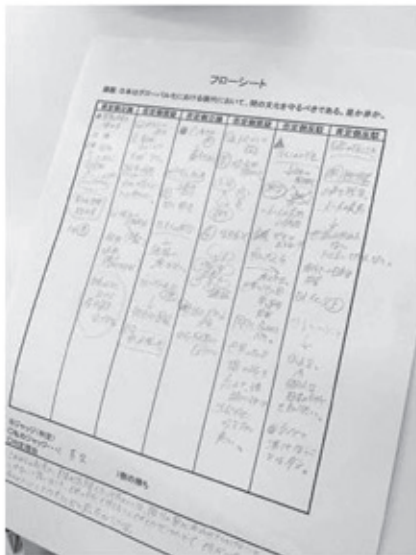
▲新聞記事の見出しやリードを考える



▲記事担当者を決め取材したことをもとに執筆



▲4-5人1グループで編集し完成



▲新聞を使って情報収集を行いディベートを行う（写真はディベート中に議論の流れを書き込むフローシート）

▼新聞記事を批判的に読み抽出した問いをKJ法でまとめる



▼一人1テーマで問いを調査し発表



4-3. 数学科 天気予報のヒストグラム作成

○中学校1年生 単元：資料の活用

統計に関する基礎知識を身につけ、**身近なデータについてグラフを用いて可視化**することを目標に取り組んだ。日本海・毎日・読売・産経の4紙に掲載されている天気予報欄をもとに、鳥取・岡山・大阪の3地点の9月の気温についてまとめる。4人1グループで担当する新聞の天気予報欄を切り抜き、模造紙上にカレンダーを作る。カレンダーを見ながら最高気温・最低気温の数値を確認していき、範囲や階級の幅について検討する。度数分布表とヒストグラム（柱状グラフ）にまとめ、相対度数も求める。担当の土地のデータの特徴を考察し発表した。



▲天気予報欄に注目しカレンダーづくり



▲数値をヒストグラム化して考察

▶鳥取・岡山・大阪の担当地点について9月の気温を考察し発表



4-4. 理科 震災当時の新聞記事をもとに防災計画

○中学校1年生 単元：活きている地球「大地がゆれる」

地震のしくみを理解したのちの発展的学習として、グループで過去の地震の事例を調べ防災計画を立ててポスターセッションを行うプロジェクト。**導入として日本海新聞の「災害弱者を守る」シリーズ上中下の新聞記事**を読み、4-5人のグループで調査を開始。グループごとに**「東日本大震災」「北海道胆振地震」などの事例を新聞記事で調査**。それぞれのグループに架空の家族構成（乳幼児がいる・高齢者がいる・身体障がいがある・ペットがいる等）が設定されており、過去に起こった地震の被害や避難の状況をもとに、どのような備えが必要かを考えまとめる。最終的に10枚のスライド資料にまとめたものをポスターにし、発表

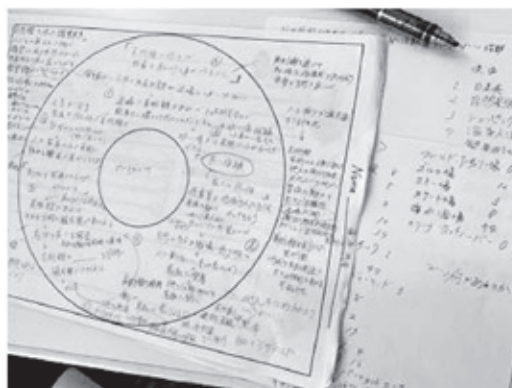
と質疑応答を行った。

4-3. 英語科 アカデミックライティング (中学校3年)

○中学校3年生 単元：Lesson7「受動態」

論理的なつながりがある英文エッセイを書くため、単元で学習した受動態を使ってライティングを行った。「鳥取に美術館を建築すべき」という意見を書いていくため、根拠となる情報を新聞記事から探した。

▶地方の美術館設置に関する新聞記事をもとに、「鳥取に美術館を建築すべき理由」を英作文



5 今年度の総括と次年度に向けての展望

5-1. 授業外の実践について

「朝新聞」の取り組みは生徒にも好評であり、教員・学年団・生徒の委員会活動を巻き込み展開することができた。活動としては定着したが、広告や好きなスポーツの結果の記事ばかり好んで読むなど、「記事選び」に偏りのある生徒もみられた。次年度は毎月注目するテーマを設けるなど、生徒の視野を広げる仕掛け・仕組みを作りたい。

5-2. 授業における実践について

実践したすべての授業について、「デザインシート（授業略案に類する定型フォーム）」を用いて司書・授業担当教員が協働で計画することにより、新聞記事を教員が導入教材として使ったり、生徒の情報活用資料として活用したりと場面に応じて効果的に使い分けることができた。また、「ルーブリック評価表」を用いてあらかじめ評価基準を生徒に示し、到達すべき目標を明らかにした上で授業をスタートしたことで授業のねらいを確実に達成することができた。実技教科など（保健体育・家庭科・美術・音楽・情報・道徳など）においてはNIE授業を実践することができなかったが、今年度実践した教科の取り組みをきっかけとして次年度NIEに挑戦したいという要望は教員から複数挙がっており、教材として新聞が有効であるということが教員間で徐々に広まりつつあると手応えも感じている。全校でのNIE実践につなげていきたい。社会科においては授業内で「消費税増税」「IWCからの脱退（捕鯨問題）」など、都度、世の中で話題になっているニュースを授業の中で取り上げ、教員から記事の紹介を行っていた。しかし、発展的学びやプロジェクト型・アクティブラーニング型の授業展開にはつながらずやや散発的で「質より量」という結果になった。次年度は教員と司書の協働による授業計画をすすめていきたい。

＜第24回 N I E全国大会・宇都宮大会に参加して＞

(2019年8月1、2日・宇都宮市)

日常的に学びに生かす

■鳥取県N I E推進協議会会長（鳥取大学名誉教授） 藤田 安一

第24回N I E全国大会が8月1日から2日間、宇都宮市で開催された。今大会のスローガンは「深い対話を育むN I E」。来年から実施される新学習指導要領を強く意識したテーマとなった。

この新しい指導要領では「何を学ぶか」だけではなく、「どのように学ぶか」を重視し、「対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を積極的に推進していくことを提唱している。

対話とは、自分と異なる意見に直面することであり、それを通じて自己の思考力と表現力を鍛えることにほかならない。

大会1日目全体会での記念講演は、こうした対話のもつ力を国語教育に生かした「大村はま」の業績が紹介された。大村はまは、またその対話の有力な手段として教育に新聞を活用したパイオニアであることでも知られている。

講演者は、大村はまの教え子であり、現在「大村はま記念国語教育の会」事務局長でもある荻谷夏子さん。講演のテーマは「N I Eの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら」である。

荻谷さんは、子どもを「一人前の言語生活者に育てる」ことを教育の目的においた大村はまの教育実践には「対話こそ教えることの基本」であるという信念があり、そのための教材として新聞の利用に熱心であったことを強調した。

スマホ全盛の現在、やたらと教育現場にも最新鋭の情報機器を持ち込んで教育することが盛んである。しかし過度なスマホ依存が、子供たちの肉体的・精神的に与えるマイナス影響が取りあげられ、深刻な社会問題となっている。

それだけに、教材として手作りの新聞を活用し子どもたちに考える喜びを引き出して、教室を魅力的にしようとした大村はまの教育方法は、現在に受け継がれるべきレガシーとして貴重である。

続いて大会では、「新聞で育む深い対話」をテーマにパネルディスカッションが行われた。6人のパネラーのなかには、お母さんとその子の姉妹が登壇し、家族で新聞づくりをしているほほ笑ましい経験が紹介された。

そのきっかけは、親子新聞教室でスクラップ作品の作り方を学んだことにある。自分たちの興味のある記事を新聞から拾って大きな模造紙に貼っていくのだ。スクラップ作品コンクールに入選したことも続ける励みになったという。

N I E活動は、単に学校教育だけで閉じるものではない。教育の場は家庭であってもいい。いや、そこにこそ教育の原点があり、N I Eは学校から家庭へそして社会へとその活動の幅が広がっていくのが望ましい。これからの生涯教育を支え充実したものにするために、N I Eの存在意義がますます高まっていくことを期待したい。

対話を促す新聞活用を

■鳥取県N I E推進協議会アドバイザー 岩井 克之

N I E全国大会のスローガン「深い対話を育むN I E」とは、新聞から学んだ知識により培った考えや意見を自らの言葉で表現し、他者と共有して深める対話的な学びの実践を求めたものである。これは、学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実践、言語能力や情報活用能力の育成につながる。また、情報化・グローバル化の時代だからこそ、信頼性の高い情報の宝庫である新聞を教材として活用し「言葉の力」を育てていくことが重要であることを示唆している。

基調講演や実践発表では、対話を促す数々の実践を学ぶことができた。対話を促すためには、子どもたちと新聞記事との出会いが大切である。また、新聞記事を読んで一人ひとりが自分の意見を持つ（自分の言葉で考え、分かる）ことが大切である。そして、他者の考えや意見を聞き、自分の考えを深める場の設定が必要である。

講演では、大村はま先生の三つの実践から、新聞の教材化において重要なことを教えられた。一つ目は、子どもの興味・関心を高め、意欲的に読み、調べ、研究したいと思う問い（テーマ）を教師がどう設定するかが何よりも大切であること。二つ目は、子ども一人ひとりが新聞を活用して自己との対話を深め、他者との対話へとつなげるための「思考のてびき」「読む着眼点」「比較の仕方」などの工夫が求められることである。

対話を促す新聞活用は、やがては社会への参画意識を高め、子どもたちの未来をよりよいものとしてくれると考える。改めて、N I Eの取り組みの重要性を実感した2日間であった。

主体性を引き出す新聞

■鳥取市立逢坂小学校 教諭 松林 隆裕

ギョーザの街、宇都宮市で開催されたN I E全国大会に参加させていただいた。

基調講演では、作家荻谷夏子さんによる、大村はま先生の新聞を活用した三つの実践が紹介された。戦後、大村先生が、これから複雑な世の中をつかもうとする子どもたちを「一人前の言語生活者に育てたい」と強く願い、子どもたちと対話を繰り返しながら、新聞の生きた情報をもとに子どもたちが本気で取り組んだ実践や指針は、情報過多の今だからこそ生きるものであるということが強く伝わってきた。

パネルディスカッションでは、これから始まる新しい学びの中で、根拠や理由に基づいた

対話の重要性や知れば知るほど新たな考えが生まれるような楽しい学習が大切であるということが語られた。その学びを実践していくためにも、子どもたちに言葉の力を付けながら、正確で公正な情報を教材化していくことが大切であるということを感じた。

「主体的に学び合う児童の育成」と題した実践発表では、子どもたちがN I E活動を通して、思考力・判断力・表現力を高め、地域や社会とつながっていく具体的な実践が紹介された。子どもの発達段階に即した新聞の活用方法、子どもたちのアイデアを生かした取り組み等、本校のN I E推進に参考になるものであった。

大会2日間を通して、学校における新聞活用のさまざまな有用性を実感することができた。中でも子どもたちのやる気や主体性を引き出す新聞活用の実践は魅力的であった。本大会で学んだことを生かしながら、子どもたちに学ぶ力を付け、主体性を引き出すしかけを全職員で模索していきたい。

新聞で情報を読み解く

■青翔開智中学校・高等学校 司書 横井麻衣子

今年度よりN I E実践指定校となり、宇都宮市で開催された第24回N I E全国大会に参加した。

初日は「N I Eの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら」と題した荻谷夏子氏の基調講演会が行われた。生徒個別に最適化した教材や、単元学習の国語教育で知られる大村はま。その一端を、生きたことばで改めて感じることができた。これまで著書でその実践に触れ、大村はまを敬愛し続けてきた私にとって、この上なくうれしい機会となった。

2日目の分科会では、「出生前診断の是非」というテーマに対し、賛成・反対の立場に分かれてディベートを行う公開授業を視察した。新聞記事を始めとしたメディアの情報を多面的に捉え、エビデンス（根拠）として提示し、意見をたたかわせる高校生の姿を見ることができた。

インターネットやスマートフォンの普及とともに、2016年頃から「フェイクニュース」が世界的な問題となっている。中学生・高校生にとって身近なソーシャルメディアの拡散性が、こうした問題に拍車をかける。情報をどう受け止め、事実とそうでないことをどう見分けるか。これからの社会を生き抜く子どもたちにとって、氾濫（はんらん）する情報をクリティカル（批評的）に読み解き活用する「情報リテラシー」の力、そして「メディアリテラシー」の力が必須である。

新聞は信頼性が高く、豊富な内容を短い時間で見通せる一覧性が高い。同じ出来事を取り上げた記事でも新聞社によって伝え方が異なり、情報を比較する教材としても優れている。全国大会で得た学びをもとに、本校でも新聞を活用した実践を積み重ねていきたい。

鳥取県N I E推進協議会 会則

(目的)

第1条 鳥取県N I E推進協議会（以下、協議会という）は、N I E（Newspaper In Education）の略称にちなみ、教育界と新聞界が協力し、新聞を生きた教材として活用し、現代社会に対応した情報能力を育成する教育を進めていくことを目的とする。

(事業)

第2条 協議会は前条の目的を達成するため次の事業を実施する。

- (1) N I E実践校・実践者を日本新聞協会に推薦すること。
- (2) N I E実践校・実践者への研究補助に関すること。
- (3) N I Eに関する研究会を開催すること。
- (4) N I E実践・研究成果の紹介や普及に関すること。
- (5) そのほか必要と認めたこと。

(構成)

第3条 協議会は次に掲げる者で構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 鳥取県教育委員会
- (3) 市町村教育委員会教育長会
- (4) 鳥取県小学校長会
- (5) 鳥取県中学校長会
- (6) 鳥取県高等学校長協会
- (7) 鳥取県私立中学高等学校長会
- (8) N I E実践指定校
- (9) 日本新聞協会
- (10) 朝日新聞社鳥取総局
- (11) 毎日新聞社鳥取支局
- (12) 読売新聞社鳥取支局
- (13) 産経新聞社鳥取支局
- (14) 日本経済新聞社鳥取支局
- (15) 中国新聞社鳥取支局
- (16) 山陰中央新報社鳥取総局
- (17) 新日本海新聞社
- (18) 共同通信社鳥取支局
- (19) 時事通信社鳥取支局

(役員)

- 第4条 1、協議会に次の役員を置き、総会で会員の中から互選する。
- (1) 会長 1名
 - (2) 副会長 若干名
 - (3) 幹事 若干名
 - (4) 監査 2名
- 2、役員任期は事業年度の期間とする。ただし再任は妨げない。
- 3、役員任務は次の通りとする。
- (1) 会長は協議会を代表し、会務を総括する。
 - (2) 副会長は会長を補佐し、会長が欠けたときは副会長の1名が職務を代行する。
 - (3) 幹事は会務を処理する。
 - (4) 監査は会計を監査する。

(総会)

- 第5条 1、協議会は、事業計画のほか運営に関する重要な事項を決定するため毎年1回定期総会を開くほか、次の場合に開催する。
- (1) 事業の実施状況の報告。
 - (2) 会長が特に必要と認めたとき。
- 2、総会は会長が招集し、その議長となる。

(委員会)

- 第6条 特定事項について検討審議するため、委員会を置くことができる。

(経費)

- 第7条 協議会の運営に関する経費は、会員新聞社・通信社の拠出金および個人、団体などからの補助金、その他の収入を充てる。

(事務局)

- 第8条 協議会の事務局は新日本海新聞社内に置く。

(事業年度)

- 第9条 協議会の事業年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

(補足)

- 第10条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。この会則に定めのない事項は、会長の承認を経て委員会に諮り決める。

(付則)

- 1 会員新聞社・通信社の拠出金は当面、新聞社が1社年額6万円、通信社が1社年額3万円とする。

以上

発行2020年6月20日

鳥取県N I E推進協議会

事務局

〒680-8688 鳥取市富安2丁目137

(新日本海新聞社内)

TEL 0857 (21) 2867

FAX 0857 (37) 0037